

# 『皇国地誌』を通して見た明治前期の京都と周辺地域の結合関係

長 島 雄 毅 \*

## I. 明治前期の地誌とその研究意義

### 1. 明治前期の地誌

明治前期には全国的な統計とともに地誌書が作成された。近代国家を形成するためには正確な統計は不可欠であり、地誌書もまた「明治維新以降の政府による富国強兵策を背景とするわが国の諸面における実態把握と、それに基づく各種政策の立案および実施のため」<sup>1)</sup>に必要とされたのであった。

最初に刊行された『日本地誌提要』<sup>2)</sup>は1972(明治5)年のオーストリアでの万国博覧会に出品するために編纂された。その内容についてみると、旧国単位で範域・沿革・郡数・戸数・人口などが統計辞典的に羅列されている<sup>3)</sup>。その後、より精細なデータを収載する『皇国地誌』の企画が1872年に太政官布告288号によって発表された。その編纂方法についてみると、各府県が調査を実施して郡誌・村誌の稿本をまず編纂し、それを政府に進達するというものであった。しかし、地方での編纂は当初の計画よりも遅れ続けた結果、1885年に内務省地理局で一括編纂されることとなり、府県による調査は取り止めとなった。ついに1893年には編纂事業自体が中止となった。政府に進達された稿本は関東大震災により失われたが<sup>4)</sup>、その写しや未提出

のものが地方に残されている場合がある。

他の地誌書や統計では郡あるいは旧国が空間単位として用いられているが、『皇国地誌』のそれは藩政村であった。これがこの地誌の際立った特徴である。明治前期の地域構造をより詳細に明らかにする上で、その資料的価値は極めて高い。

### 2. 『皇国地誌』の研究動向

『皇国地誌』編纂の思想や経緯について論じた石田龍次郎によると、それが完成しなかったのは「編纂事業推進の政治力の不足、歴史的記述に墮し、かつ国家事業の発達により行政上の価値の減少、それに画一的な編纂計画上の欠陥」があったことなどによる<sup>5)</sup>。県レベルでの編纂過程に関しては、重田正夫が埼玉県の『武蔵国郡村誌』を例にして、明らかにしている<sup>6)</sup>。

地理学では『皇国地誌』の稿本のうちで『滋賀県物産誌』を用いた事例研究が比較的多い<sup>7)</sup>。それは同書に県内の全地域の資料が収載されていること、またその翻刻版も刊行されていることなどによるとと思われる<sup>8)</sup>。1960年代に小林博は滋賀県の上位中心地・京都との関係について主に商品流通等の観点から分析した<sup>9)</sup>。浮田典良は農産物の生産分布の相関関係、農産物の販売先・販売額等をもとに当時の滋賀県の農産物流通を考察した<sup>10)</sup>。水谷彰伸は滋賀県内の麻・絹・綿織物の生産体系について論じた<sup>11)</sup>。また、経済史では遠藤

\* (株) 神戸製鋼所

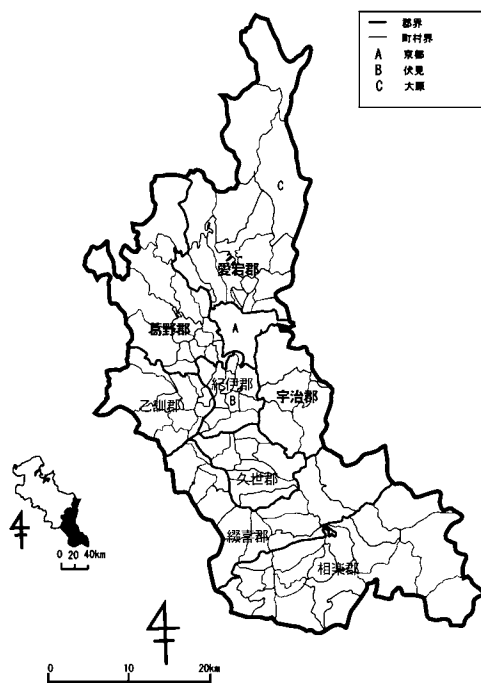
冨己が米穀の流通を事例として、明治前期の滋賀県内における中継的市場の存在を明らかにしている<sup>12)</sup>。

『滋賀県物産誌』が活用されているのに比べて、京都府による『皇国地誌』の稿本である『京都府地誌』を用いた研究例は少ない。地理学では、河島一仁が京都近郊地域の分析に補足的に利用している程度である<sup>13)</sup>。本稿では、『京都府地誌』をもとに、明治前期の京都とその周辺地域との、第1次産業の生産物を介した結合関係を考察することが目的とされる。具体的な方法としては、第一に『京都府地誌』の各郡村誌から、特徴的な生産地分布を示す数種類の「物産」を抽出する。第二に、対象地域内の大原と伏見を例にして、それらの内部構造を考察する。

## II. 明治前期の山城

本稿の研究対象地域は第1図に示したように旧国の山城である<sup>14)</sup>。明治維新後に山城は京都府の管轄となり京都・伏見の市街地と8つの郡によって構成されていた。山城は、現在の右京区旧京北町域と左京区広河原を除く京都市域および府南部の市町村域を合わせた地域とほぼ一致する。

北部の愛宕郡・葛野郡などと南部の綴喜郡・相楽郡の一部には山間地域が位置し、その他の地域は概ね平地となっている。日本海側の気候の影響を受ける山城北部においては冬季に積雪がみられる。河川についてみると、葛野郡を桂川が、宇治郡を宇治川が、相楽・綴喜郡を木津川がそれぞれ流れ、やがてそれらは合流して淀川となる。また、明治前期には紀伊郡と久世郡の境界には巨椋池が広がり、



第1図 山城地域概観図

注：太線の範囲内を研究対象地域とする。第2～7および13図も同様の地域を表すものとする。

資料：京都府立総合史料館編『京都市市町村合併史』、京都府、1968。

付随の「明治22京都府管内図1（山城）」を基図とする。

内水面漁業が営まれていたが、1941年にこの池は干拓された<sup>15)</sup>。産業についてみると、京都・伏見を除くとほぼ全ての町村では農業が中心であった。特に平野部では野菜・茶・実綿・菜種などが生産されていた<sup>16)</sup>。また、農産物ならびに旅客の輸送手段として船が用いられた。淀川では1868（明治1）年に蒸気船が初めて就航し、伏見—大阪<sup>17)</sup>間で1910（明治43）年まで運行された<sup>18)</sup>。

1869（明治2）年の東京奠都により、京都では戸数が1万戸近く減少した。政府は復興策として京都に産業基立金を下付した。それは農産物や手工業加工品などの改良生産と失

業者の正業復帰、府内経済流通の円滑化などに用いられた<sup>19)</sup>。その具体的施策として製糸場や伏水（伏見）製作所などの工場や学校の建設、博覧会の開催などが行われた。これらの事業は「広い意味での文明開化、すなわち京都の伝統と改革とを融合しつつ、新しい時代への転身をはかった、というところに特色があった」<sup>20)</sup>とされている。このような変化を遂げつつある山城で『皇国地誌』のための調査が行われたのであった。

### III. 明治前期における第一次製品の生産地

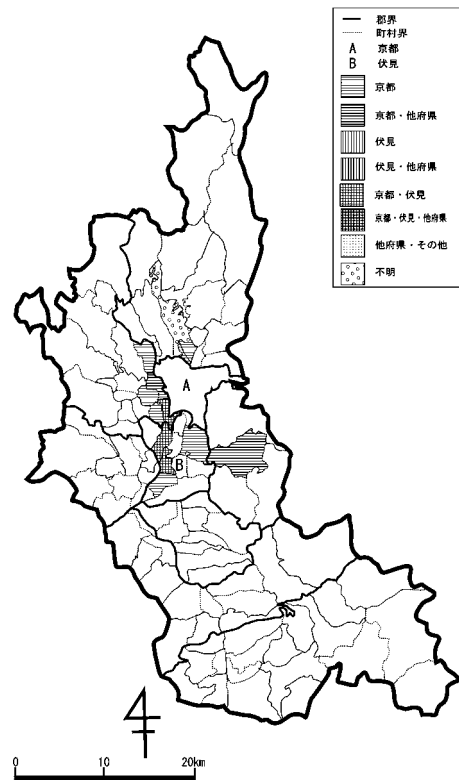
#### 1. 『京都府地誌』とその分析方法

本稿で用いる『京都府地誌』とは「太政官の全国的な地誌編纂事業の一環」として「京都府が編輯提出した『皇国地誌』の稿本」<sup>21)</sup>である。それは「京都市街誌料五冊、伏見区市街誌料一冊、山城八郡と加佐郡の各郡誌九冊、及びその村誌二十冊」<sup>22)</sup>で構成されている。『京都府地誌』には、太政官の例則に準じて藩政村ごとに名称・範域・管轄沿革・里程・地勢・戸数・人口・牛馬数・舟車数・山川・道路・社寺・物産・民業などの項目が掲載されている<sup>23)</sup>。ただし、同じ物産を表す場合でも村ごとに単位が統一されていないこと、ならびに調査の正確な時期が不明であることなどの不備な面を有している。

このような限界を踏まえた上で『京都府地誌』中の山城に関する記載を資料として用いる。図作成のための基図としては1889（明治22）年頃の仮製地形図を用いる。なお、本章では、1889年の市制町村制によって成立した行政区域を分析のための空間単位とする。

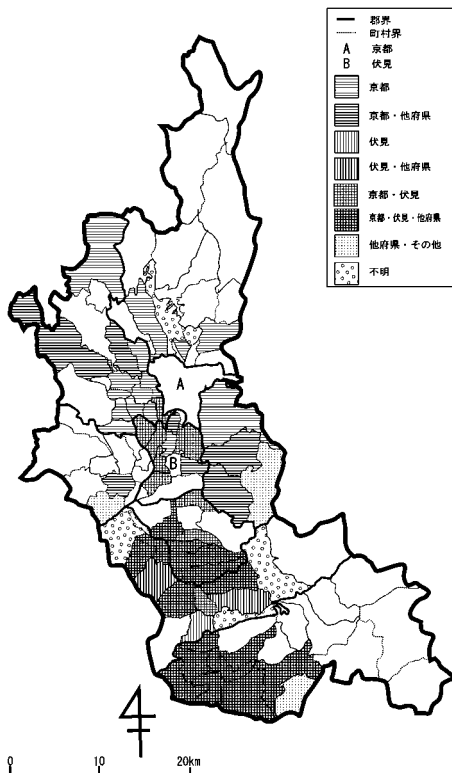
#### 2. 野菜の生産地

この頃、具体的な輸送手段は『京都府地誌』の項目からも分かるように牛馬を用いた車と船であった。第2図は葉菜<sup>24)</sup>の生産地を示したものである。これによると、その生産は京都周辺の村々でのみ行われているように見える。とはいえ、それ以外の地域で葉菜の自給用の生産が全く行われていなかったとは考えられない。要するに販売目的のために葉菜の生産が行われていたのは京都周辺の村々であったと考えられる。これに対して第3図は根菜<sup>25)</sup>の生産地を示したものである。根菜は葉菜と同様に京都近辺でも生産されている

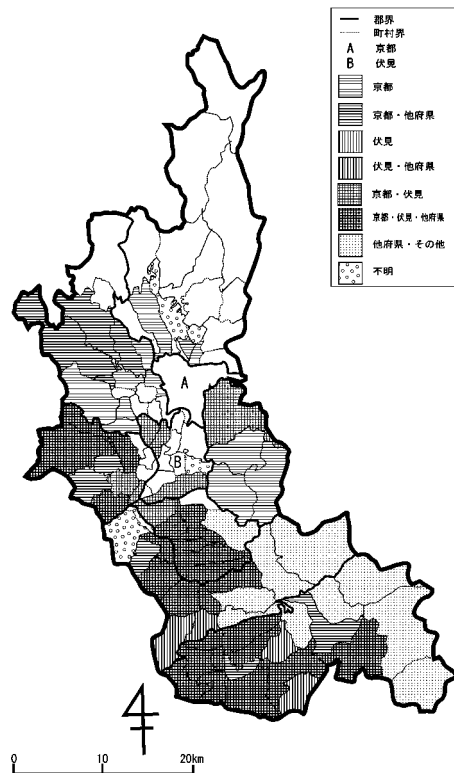


第2図 葉菜の生産地と出荷先

資料：『京都府地誌』各郡村誌をもとにして筆者作成（第3～7図も同様）。



第3図 根菜の生産地と出荷先



第4図 茶の生産地と出荷先

が、愛宕郡北部、相楽郡東部を除いた各地で広く生産されている。その生産地は葉菜のそれを取り囲むように分布している。その理由は根菜が葉菜と比較して、その品質保持が容易であるためである。

葉菜と根菜の出荷先についてみると、京都近辺や京都以北の地域ではそれらは京都へ出荷されている。しかし久世郡・綴喜郡・相楽郡など山城南部からは京都にも出荷されているが、伏見や他府県への出荷がより顕著であった。

### 3. 茶の生産地

第4図から明らかなように、茶は多数の町村で生産されている。この当時、茶は主要な輸出品でもあった。特に宇治郡・綴喜郡・相

楽郡などでは、現在と同様に茶の生産が盛んであったことがわかる。それらの地域からは京都・伏見だけでなく、奈良・大阪・神戸などに出荷されていた。それが可能であったのは木津川の水運によるところが大きい。京都に近接する村でも製茶業は行われているものの、それよりも北方の村ではさほど盛んではない。紀伊郡でも、半数以上の村々は製茶業を行っていない。乙訓郡は大阪と隣接しているため、大阪方面への出荷が多い。

茶に関しても伏見は京都と並ぶ主な出荷先であった。伏見の場合には他府県への茶の出荷港としての役割が大きかった<sup>26)</sup>。

### 4. 菜種・実綿の生産地

菜種・実綿は明治前期には工芸作物として

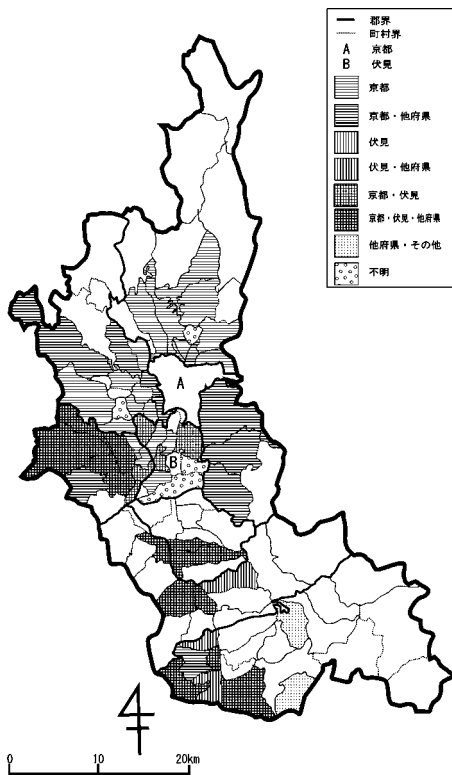
広く生産されていた。特に実綿は茶と並ぶ主要な輸出品であった。明治後期の『大日本地誌』<sup>27)</sup>においては、菜種・実綿ともに近畿地方の「特用農産物」とされている。

第5図は菜種の生産地の分布を示している。これによると、菜種は京都に向けて、山城で広く生産されていることがわかる。特に生産地が密集しているのが宇治・紀伊・乙訓の3郡である。また、葛野・愛宕両郡の南部、並びに山城南部の久世・綴喜・相楽郡などの平野部でも生産されている。これらの地域の菜種は、京都の他に大阪など他府県へも出荷されている。

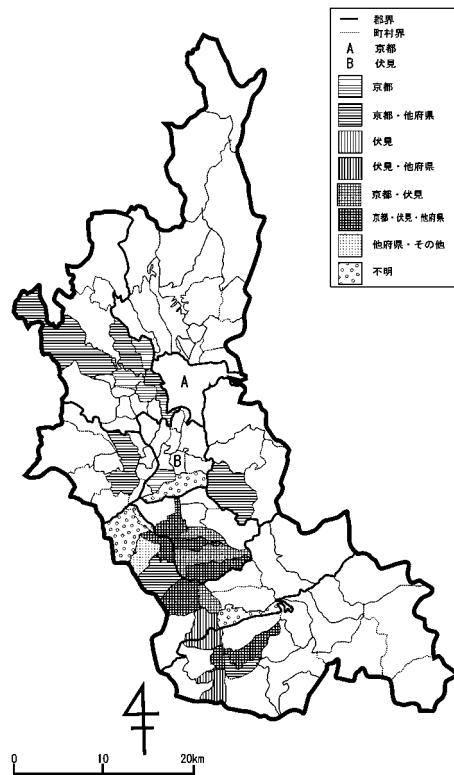
他府県にも出荷されている実綿の生産地の分布を示す第6図をみると、その特徴とし

て、京都から比較的遠い地域で生産がされていることが明らかである。葛野郡では京都と隣接する村でも実綿が生産されていることが確認された。しかし、愛宕郡では実綿を生産する村は皆無である。紀伊・宇治の各郡では生産されているものの、京都に近い村では生産されていない。

菜種と実綿は明治前期の主要な工芸作物であった。しかし、菜種は京都に隣接する村々を含む、より広い地域で生産されている。それに対して、実綿は京都から比較的離れた村々で生産されていることが明らかとなった。そして、乙訓郡では大阪方面に出荷されるものが多い。



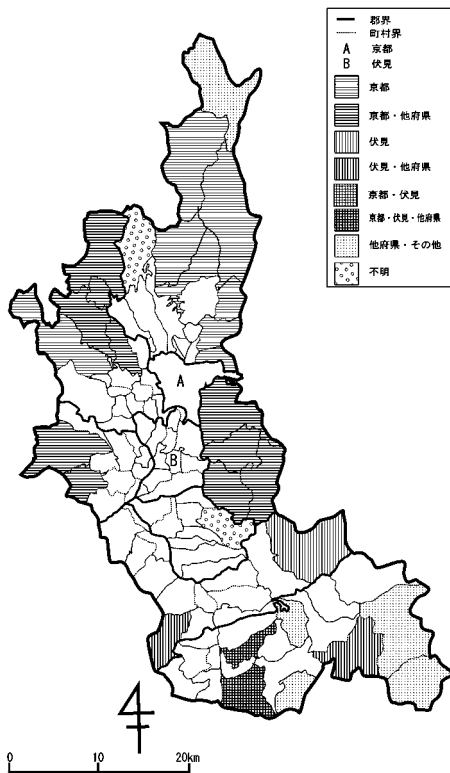
第5図 菜種の生産地と出荷先



第6図 実綿の生産地と出荷先

### 5. 薪炭の生産地

薪炭の製造は明治前期の山村における重要な生業であった。市街地では燃料の需要は大きく、それに応える形で山間地域の村々では薪炭の生産が行われていた。第7図は薪炭生産地の分布を示している。これによると生産地は山城の外縁部に分布していることがわかる。特に愛宕郡と葛野郡の北部で多く生産されている。その他の郡で目立つのが、4ヶ村全てで生産されている宇治郡である。しかし、藩政村単位で調べてみると、4ヶ村それぞれの平野部では主に野菜が生産され、山間部で薪炭が生産されていたことがわかる<sup>28)</sup>。言い換えると、正確には宇治郡の山間部において薪炭が生産されていたことになる。



第7図 薪炭の生産地と出荷先

薪炭生産地の分布と他の生産物の分布を比較してみると、重複しない部分が多いことが読み取れる。それが顕著な愛宕郡と葛野郡についてみると、京都に近接する村では野菜が主に生産されているものの、薪炭は生産されていない。しかし北部の村では逆のことが言えるのである。また、第1表から明らかなように薪炭を生産している村の多くではそれ以外のものが「物産」として記されていない。このことから、薪炭生産地では他の商品作物を生産する必要がなかったか、あるいは自然条件などにより生産が不可能であったかと考えられる。

以上、数種類の第1次産業製品について、その生産地と出荷先を明らかにした。京都に近接する複数の村では葉菜が生産され、その外側に根菜を生産するいくつかの村が位置する。そして、その両方の地域にまたがるようにして菜種生産地が分布している。これらを除く地域については京都以北と以南とは異なった状況が確認できる。すなわち、北部の山間地域には薪炭生産地があり、南部では平野部に茶生産地がある。出荷先についてみると野菜や菜種・薪炭のような生活必需品は生産地から京都へ出荷される場合が多くなる。それに対して、茶・実綿は全国的な需要を有し輸出品でもあるため、伏見から他府県や外国にも出荷されることが多かったのである。

## IV. 京都近郊町村の地域的特徴

### 1. 大原と京都市街地の結合関係

#### (1) 分析方法

本章では藩政村単位のデータをもとにして考察を行う。第一に当時の山間地域の主要な

第1表 愛宕郡・葛野郡の薪炭生産地とその物産

	薪	炭	材木		その他	
			炭	材木	材木	その他
高野村	薪4,000束	炭10,000俵	松皮付円材3,000本	杉円材12,000本	松茸3,000貫目	
西紫竹大門村	薪50,000束	炭	材木			
雲々畑村	薪					
八瀬村	薪類3,000駄	炭1,200俵			馬鈴薯8石8斗5升	
百井村		炭400駄				
大見村		炭300駄				
尾越村		石炭3,000俵			茶300斤	
静原村	薪40,000本				木ノ芽1貫500目	山椒皮300目
鞍馬村	薪128,000束					
費船村	薪10,000石	石炭3,500俵				
二之瀬村	薪類190,000束					
大布施村		炭100俵	檜材500本	杉材300本		
別所村		炭				
八研村		炭300駄	材木800本			
原地新田		炭300駄	材木800本			
中在地村		炭3,000俵				
上村		炭6,000俵	杉材10,000本			
下村		炭2,000俵	杉材1,500本			
宮谷村		炭2,000俵	檜材10,000本	杉材10,000本		
河合村		炭1,000俵	杉材500本			
上籠織村	薪2,000束	炭500俵				
小野村		炭3,600俵	杉板1,000間	杉細円材300本	竹1,200駄(4束=1駄)	砥石300駄(40貫=1駄) 各種豆100余石 菜種300石
杉坂村	薪200,000貫目	松炭600俵	杉細円材1,000本	杉種材1,500本	松茸60貫目	蘿蔔35貫目
大森村	薪250駄		杉板1,200坪	杉小割材4,500本	松茸1,000貫目	柚子20駄
真弓村	薪50,000貫目	炭600俵				
中川村	薪15,000束			杉13,000本		
梅々畑村	薪283,186貫目	炭15,200俵	材木19,000本	挽板2,400間	製茶550斤	砥石35,130貫目
						柚子500個 鞍掛3,500個

注：表には愛宕郡・葛野郡において薪または炭を生産している村を掲載した。ただし、一部の村は第4表で掲載しているため省略した。  
資料：『京都府地誌愛宕郡誌』『京都府地誌葛野郡誌』各巻をもとにして筆者作成。

物産であった薪炭に関して、愛宕郡大原郷 8 か村を取り上げる。製炭業を主要な生業としていた当時の大原が、京都とどのような結合関係にあったかが明らかにされる。そして、第二の対象地域として、京都に次ぐ人口規模を擁し、歴史的にも京都と起源を異にする伏見を取り上げる。伏見と京都が周辺町村からの物資の供給においてどのような関係をそれぞれに有していたのか、製茶業と絡めて明らかにする。

### (2) 大原の地理的特徴

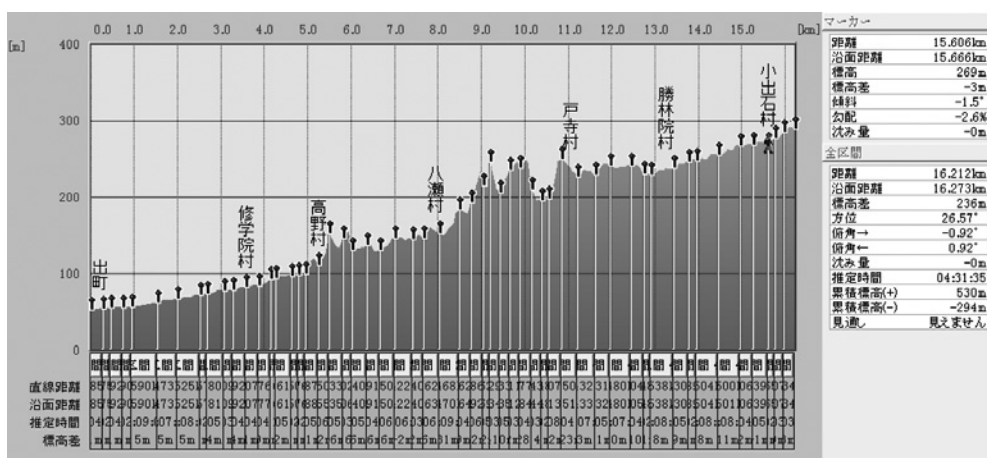
1883 (明治 16) 年に勝林院村、戸寺村などの大原郷 8 か村が合併して大原村<sup>29)</sup> が成立した。この節では『京都府地誌』が編纂された 1880 年頃の大原郷 8 か村を対象地域とし、これらを「大原」と総称する。

薪炭の生産が山間村落で行われていたことは第 7 図で確認できた。第 8 図は京都市街地から大原への標高断面を示したものである。この経路は大原街道、若狭街道などと呼ばれ、京都と若狭地方を結ぶ主要街道であった。そ

して第 2 表は経路途中の村々の物産と出荷先を示したものである。これらの図表を合わせて検討すると、標高約 100 m 地点にある高野村を境に様相が一変することがわかる。修学院までの各村は野菜や工芸作物を生産しており、近郊農業を行っている。それに対して、大原のような山間村落は標高 200 m 以上に位置して薪や炭を生産しているのである。

### (3) 大原の民業

第 3 表は大原の各村の戸数・人口・物産・民業を示したものである。人口については最小の大長瀬村が 19 戸 102 人、最大の草生村が 42 戸 223 人の規模である。物産に関しては 8 か村全てが薪、あるいは薪・炭の両方を出荷している。他の物産は記載されておらず、それらが主要な物産であったことがわかる。一方で民業の項目を見ると、戸寺村を除く 7ヶ村で「男農ヲ専業トシ余暇ニ山ニ入薪焼炭ス」<sup>30)</sup> という記載がされている。また、戸寺村においても社 1 戸を除く 41 戸中 15 戸は農業に従事している。このように、物産の項



第 8 図 出町～小出石村の標高断面図

資料：『20 万分の 1 地形図』『50 m メッシュ』データを使用して「カシミール 3D」により作成。



第2表 出町～小出石村の物産と出荷先

村名	物産	出荷先
田中村	菜種 700 石	京阪
高野河原村	製茶 220 斤	京都及び近傍
修学院村	西瓜 2,600 顆、茄子 220 荷、大根 1,220 荷	京都
高野村	薪 4,000 束	京都
八瀬村	薪 3,000 駄	京都
戸寺村	薪 12,000 束、炭 500 俵	京都
上野村	薪 14,000 束、炭 500 俵	京都
来迎院村	薪 13,000 束	京都
勝林院村	薪 9,000 束、炭 1,000 俵	京都
小出石村	薪 150 駄、炭 1,100 駄	京都

資料：『京都府地誌 愛宕郡村誌二』をもとにして筆者作成。

第3表 明治前期の大原

	戸数 (戸)				人数 (口)			物産		民業	
	本籍	社	寺	総計	男	女	総計	薪 (束)	炭 (俵)	男	女
戸寺村	41	1		42	102	98	200	12,000	500	農ヲ業トスル者15戸余ハ採薪業トス	農事及ヒ採薪共に夫業に従フ
井出村	29	2	2	33	87	72	159	11,000	300	農業ヲ専トシ余暇ニ山ニ入採薪焼炭ス	夫業ニ従フ
野村	32	1	1	34	81	79	160	5,000	300	農ヲ専業トシ余暇ニ山ニ入採薪焼炭ス	
上野村	33	1		34	93	83	176	14,000	500	各農業ヲ専務トシ余ハ山ニ入採薪焼炭ス	夫業ニ従フ傍京都ニ行商ス
大長瀬村	17	1	1	19	56	46	102	5,000		農ヲ業トシ及ヒ採薪雑業等ヲナス	各夫業ニ従フ
来迎院村	31	1	7	39	101	65	166	13,000		皆農ヲ専トシ余暇ハ山ニ入り採薪或ハ焼炭ス	
勝林院村	28	1	7	36	86	83	169	9,000	1,000	共ニ農ヲ専業トシ余暇山ニ入採薪焼炭ス	
草生村	39	1	2	42	119	104	223	10,000	1,000	農ヲ専業トシ余ハ山ニ入採薪焼炭ス	各夫業ニ従ヒ余暇ヲ戴キ京都市街ヘ商ス
合計	250	9	20	279	725	630	1,355	79,000	3,600		

資料：『京都府地誌 愛宕郡村誌二』をもとにして筆者作成。

目において農産物が全く記載されていないにも関わらず、民業として農業が取り上げられているのはなぜであろうか。『京都府地誌』には「物産」として米を挙げている村はない。この理由は、米が一般的な農産物であり、特産物として考えられていなかったためと思われる。大原でも大多数の村民は農業、しかも米を生産し、その傍ら薪炭を生産していたのであろう。ただし、米が商業的に出荷されていたのか、あるいは自給自足を目的に生産されていたのか、『京都府地誌』からはうかがい知ることができない。次に、当時の仮製地形図を用いて分析する。第9図は仮製地形図を基図として作成された、大原の土地利用図である。大原の南北を貫くように若狭街道が通っており、それに沿うように平地が位置している。そして、西部と東部には山地が広がっている。土地利用を見ると、平地は水田として利用されている。そして山間部には、はい松地や広葉樹林が広がっている。この山間部

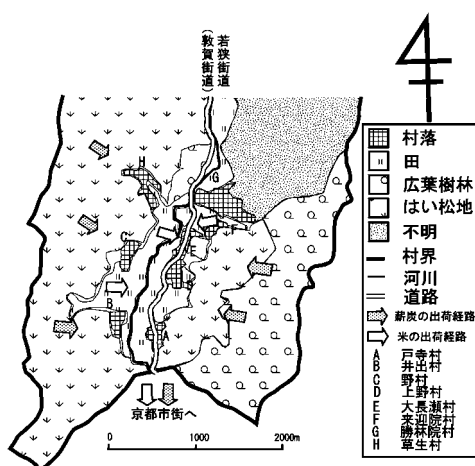
の樹木を利用して、薪炭が生産されていたと考えることができる。

このように、大原では米とともに薪炭が生産されていたことが明らかである。しかし畑に関しては地形図からは確認できない。つまり、大原の農業は米作中心であり、冬季に炭を生産していたと考えることができる。そして薪炭は若狭街道を通して京都市街へ出荷されていたのである。また、草生村、上野村の民業の項目には「女各夫業ニ従ヒ余暇ヲ戴キ京都市街へ商ス」<sup>31)</sup>とあり、これは「大原女」と呼ばれる市街へ行商に行っていた女性のことだと解されよう。

## 2. 伏見と京都の結合関係

### (1) 伏見の歴史地理的特徴

伏見は豊臣秀吉の伏見城築城によって形成された。伏見城築城以前は「伏見山に近き邊に、部落の散在するに過ぎ」<sup>32)</sup>なかった。築城以後「かくて伏見町は絢爛たる伏見城とともに出現し、こゝに経済的發展を遂ぐる」<sup>33)</sup>に至ったのである。従って、伏見の歴史は400年余りにすぎない。近世には伏見奉行所が伏見を管轄していた。そして、昭和6年に伏見市が京都市に吸収合併されるまで行政上でも独立した都市であった。第4表で明らかなように、伏見の5,000戸中2,000戸が商業に従事しており、商業都市として発達していたことがわかる。仮製地形図を基図として作成された第10図は、1889年頃の伏見の交通路を示したものである。伏見と京都とは伏見街道と竹田街道、ならびに高瀬川とでつながっている。高瀬舟による舟運が行われた高瀬川は、幕府の命令を受けた角倉了以によって開削され、1611年に完成した<sup>34)</sup>。高瀬川と伏見で合流する宇治川は、桂川・木津川と合流して



第9図 大原の土地利用図

注：大原の北部については仮製図が作成されていないため示していない。

資料：仮製2万分の1「大原村」（1889年）をもとにして筆者作成。

第4表 伏見の人口構成と民業

	戸数(戸)				人数(口)			民業								
	本籍	寄留	社	寺	総計	男	女	総計	男(戸)				女(人)			
									商業	農業	工業	その他	商業	農業	工業	その他
第1区	1,011	15	1	18	1,045	2,061	2,138	4,199	180	290		250	30			108
第2区	948	1		13	962	1,896	1,860	3,756	320		190	438				323
第3区	1,815		3	35	1,853	3,398	3,424	6,822	541	90	244	665	94	18	9	
第4区	1,750	3	1	14	1,768	3,423	3,415	6,838	883		61	662				80
合計	5,524	19	5	80	5,628	10,778	10,837	21,615	1,924	380	495	2,015	124	18	9	511

資料：『京都府地誌 伏見市街誌料』をもとにして筆者作成。

淀川となる。要するに京都、伏見そして大阪は舟運によって結びついていたのである。このように伏見は陸運・水運の両方によって他地域と結びついていたことがわかる。

#### (2) 山城南部の茶出荷と伏見との関係

前章で明らかにしたように、この山城南部の綴喜郡、相楽郡などの地域では茶を京都ではなく伏見あるいは他府県に出荷している町村が多い。伏見の人口規模や商業の中心であったことから考えてみると、伏見に出荷された茶は伏見で消費されたとは考えられない<sup>35)</sup>。伏見の流通拠点としての機能について、茶を例として考察する。

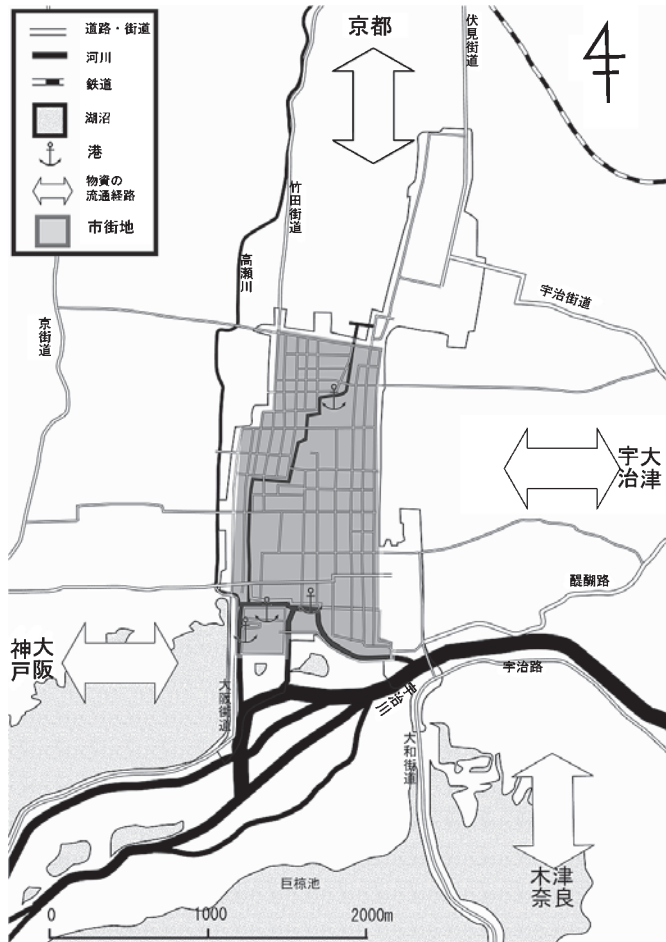
山城南部からの茶は伏見や大阪に出荷されたものが多い。伏見に出荷されたものについては大和街道を通して運搬されたと考えられる。大阪には一旦伏見を経由して運搬されたもの、木津川を通して淀を経由して大阪へ運搬されたものの2通りが考えられる。石井寛治によると、「山城茶は近世以来、木津川・淀川経由で大阪へ運ばれ」<sup>36)</sup> たものが多かったようである。ただし、『京都府地誌』によると伏見に出荷していた村が多数ある。伏見まで運搬されたものは、そこから大阪など各地に出荷されたと考えられる。当時の伏見の港

湾機能は第10図中に示した京橋付近の北浜、南浜、西浜と外堀内の堀浜にあった。ここで茶は積載され、宇治川経由で大阪、神戸、大津等へ、あるいは高瀬川経由で京都へ出荷されていったのである。

京都は古代からの都であり、全国から物産が集中しており、都市としては伏見よりも大規模であった。しかし、伏見が京都よりも優れていた点が港湾機能である。高瀬川の舟運の拠点機能は伏見にあったと言える。明治以降、交通機関の発達・整備によって流通拠点としての地位を伏見は失い、京都市に合併されることになったと解することができよう。

## V. 京都と周辺地域との結合関係

明治前期の京都は周辺地域からの生産物が供給されて、都市として存立していた。しかし、その内容を細かく見た場合、周辺地域は実に多様であったことがわかる。第11図は周辺地域からの「物産」の供給を示したものである。京都以北の地域においては京都に近接したところでは野菜が生産され、京都に出荷されている。また、その中でも京都に近い地域では葉菜が、比較的離れた地域では

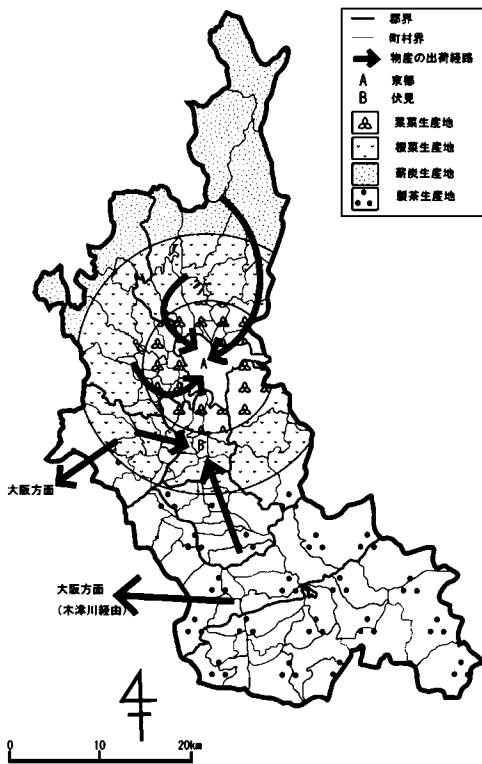


第 10 図 伏見と物資の流通経路

資料：仮製 2 万分の 1「伏見」（1889 年測量）、仮製 2 万分の 1「淀」（1890 年測量）をもとにして筆者作成。  
 また、街道の名称は以下の資料による。  
 京都府紀伊郡役所『京都府紀伊郡誌』、京都府紀伊郡役所、1972、16～17 頁。

根菜が生産されていた。菜種は野菜が生産された地域の中で広く生産されている。そして、大原のような標高 200 m 以上の山間村落においては薪炭が生産され、冬季に京都へ出荷されていた。一方、久世・綴喜・相楽の各郡では根菜・茶・菜種・実綿・薪炭等の生産・出荷が行われていた。その中で最も広く生産・出荷されていたのが茶である。そして、この地域の特徴は出荷先を必ずしも京都府内だけに求め

ていないことにある。それは木津川水運によって大阪へ直結することができたためである。茶が当時の日本における輸出品目であったことも踏まえるべき点である。しかし、京都方面や大津方面への出荷に際しては、伏見を経由していたと考えられる。陸運・水運に恵まれた条件を持つ伏見は物資輸送の中継点として重要な役割を担っていた。京都—大阪間の物流も高瀬川～伏見～淀川経由が主要な



第11図 山城の「物産」供給経路

資料：『京都府地誌』各郡村誌および考察結果をもとにして筆者作成。

ものであったことからすると、伏見の存在を抜きにしては京都の存立はありえないものであったといえることができるように思われる。

本稿では『京都府地誌』の分析から、京都と周辺地域との結合関係を明らかにした。ただし、『京都府地誌』には第3章冒頭で述べたように、資料的限界があるのも事実であり、今回の研究においては数量データを用いることがほとんどできなかった。これは今後の研究課題である。

〔付記〕本稿は、2007年12月に立命館大学文学部地理学専攻に提出した卒業論文を大幅に加筆・修正したものです。「地理学演習Ⅰ・Ⅱ」の担当・卒業論文口頭試問の主査として、

終始ご指導・ご教示いただいた河島一仁先生に厚く御礼申し上げます。また、卒業論文口頭試問の副査としてご助言を下さった加藤政洋先生、「デジタルグラフィック演習」においてご指導いただいた河角龍典先生にも御礼申し上げます。

## 注

- 1) 有蘭正一郎他5名編『歴史地理調査ハンドブック』、古今書院、2001、45頁。
- 2) 『日本地誌提要』は全8冊からなり、第1～3冊は内務省地誌課によって、第4～8冊は元正院地誌課によって編纂された。  
『日本地誌提要』(全8冊)、1874～1879。
- 3) 『日本地誌提要』復刻版冒頭の解題より。(藤岡謙二郎『『日本地誌提要』の価値』(元正院地誌課『日本地誌提要』、臨川書店、1982、所収)、1～3頁。)
- 4) 山口静子「『郡村誌』と『大日本国誌』—明治政府の地誌編纂事業—」、東京大学史料編纂所報12、1977、52～67頁。
- 5) 石田龍次郎「皇国地誌の編纂—その経緯と思想—」、社会学研究8、1966、1～66頁。
- 6) 重田正夫「埼玉県における皇国地誌の編纂過程」、文書館紀要18、2005、13～46頁。
- 7) 他県では『岐阜県各村畧誌』から、岐阜県内の産業構造を分析した研究などがある。  
野原敏雄『地域産業の成立と展開』、中京大学商学研究叢書編集委員会、1982、36～63頁。
- 8) 当時の滋賀県は旧若狭国を含んでいたが、『滋賀県物産誌』翻刻版には旧若狭国部分の郡村誌は含まれていない。  
滋賀県市町村沿革史編さん委員会編『滋賀県市町村沿革史 第5巻』、滋賀県市町村沿革史編さん委員会、1962、989頁。
- 9) 小林 博「滋賀県における京都の影響圏」(小牧實先生古稀記念事業委員会編『人文地理学の諸問題』、大明堂、1968、所収)、219～233頁。
- 10) 浮田典良「明治前期滋賀県における農業と農産物流通—『滋賀県物産誌』による町村別検討—」、人文地理37-4、1985、289～309頁。
- 11) 水谷彰伸「明治前期の滋賀県における織物の生産とその分布—『滋賀県物産誌』の分析による—」(関西大学文学部地理学教室編『地理学の諸相—「実証の地平」—』、大明堂、1998、所収)、285～304頁。
- 12) 遠藤冴己「明治初期における米穀の地域流通についての数量的分析—『滋賀県物産誌』を用いて—」、市場史研究24、2004、95～111頁。
- 13) 河島一仁「京都近郊の地理的变化(1889～1940)—等持院村、マキノ省三、そして中川小

- 十郎一」、立命館文学 593、2006、641～677 頁。
- 14) 山城国は 1871 (明治 4) 年に京都府に編入された。しかし、明治前期の地誌書では旧国単位で調査がなされるなど、旧国の概念は残っていた。
- 15) 森谷尅久編『図説 京都の歴史』、河出書房新社、1994、270 頁。
- 16) 京都府『京都府地誌』各巻、京都府、1881～1884。  
本研究ではこのうち『宇治郡村誌』、『愛宕郡村誌』(全 3 冊)、『葛野郡村誌』(全 2 冊)、『紀伊郡村誌』、『久世郡村誌』、『相楽郡村誌』(全 3 冊)、『綴喜郡村誌』(全 2 冊)、『伏見区市街誌料』を用いた。なお、茶が出荷されるまでに製茶の段階を経ていることは言うまでもない。
- 17) 大阪は明治期になってからも「大坂」と表記されてきたが、本稿では「大阪」と表記する。  
平凡社地方資料センター編『大阪府の地名 (日本歴史地名体系 第 28 巻)』、平凡社、1986、355 頁。
- 18) 前掲 15)、242 頁。
- 19) 林屋辰三郎編『京都の歴史 7 維新の激動』、学芸書林、1974、425～427 頁。
- 20) 京都市編『京都 歴史と文化 1』、平凡社、1994、139 頁。
- 21) 京都府立総合資料館歴史資料課『京都府立総合資料館所蔵文書解題』、京都府立総合資料館、1993、84 頁。
- 22) 前掲 21)、84 頁。
- 23) 前掲 21)、84 頁。  
「皇国地誌編輯例則」、地名学研究 1、1957、49～54 頁。  
当時、他の統計資料の集計単位は郡あるいは旧国単位であった。例えば、『共武政表』は村単位での統計が記載されているが、全てを網羅してはいない。明治 8 年版では人口 1000 人以上、明治 11 年版以降では人口 100 人以上の「輻輳地」の戸数、物産等のデータが掲載されている。しかし、物産の生産量は記載されていない。
- 24) 水菜、壬生菜、紫蘇などが生産されていた。
- 25) 蘿蔔、牛蒡、甘藷などが生産されていた。
- 26) 石井寛治「南山城茶業の展開と茶業金融」(石井寛治・林 玲子編『近世・近代の南山城 綿作から茶業へ』、東京大学出版会、1998、所収)、285～314 頁。
- 27) 山崎直方、佐藤傳藏編『大日本地誌 4』、博文館、1905、549～555 頁。
- 28) 第 7 図では宇治郡全体において薪炭の生産がされているように読み取れるが、宇治郡 4 か村を藩政村単位で見た場合、山科村では 25 か村中 1 か村、醍醐村では 4 か村中 2 か村、笠取村では 5 か村中 3 か村、宇治村では 4 か村中 2 か村のみでしか生産されていない。  
『京都府地誌宇治郡村誌』
- 29) 戸寺村、井出村、野村、草生村、勝林院村、来迎院村、大長瀬村、上野村の 8 か村。  
その後、1889 年の市制町村制施行に伴い、小出石、百井、大見、尾越の各村を合併した。
- 30) 『京都府地誌愛宕郡村誌二』、野村の頁。
- 31) 前掲 30)、草生村の頁。
- 32) 伏見町役場『伏見町誌』、伏見町役場、1929、100 頁。
- 33) 前掲 32)、101 頁。
- 34) 前掲 15)、183 頁。
- 35) 『伏見区市街誌料』によると明治 9 年頃の伏見第 1～4 区の人口は 21,615 人である。
- 36) 前掲 26)、291 頁。